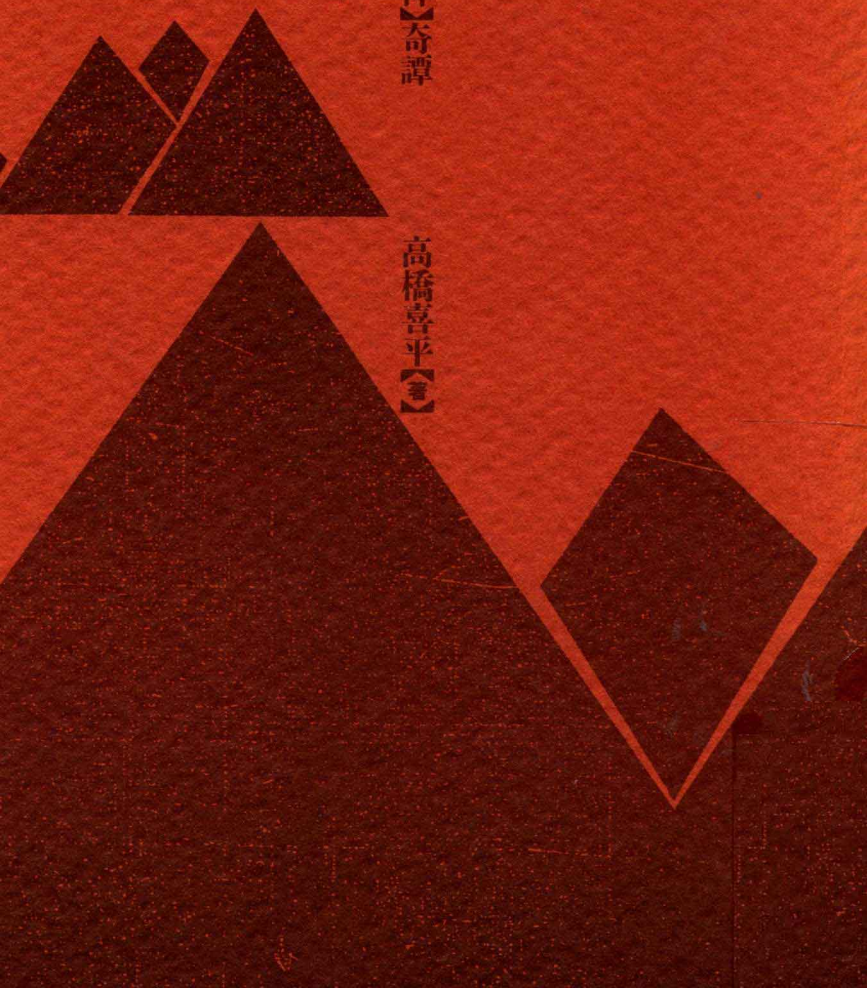
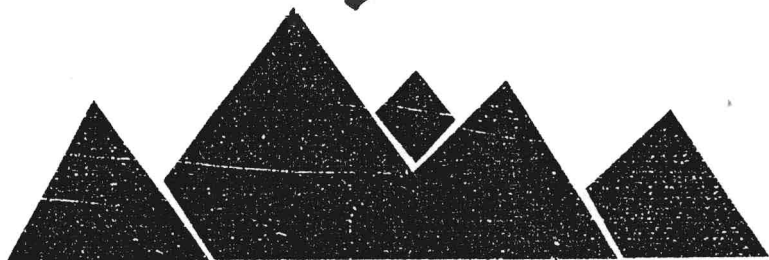


東北のロビンソン【山の神】奇譚

高橋喜平【著】



東北の
ロビンソン
山の神 奇譚



高橋喜平【著】

創樹社

●著書略歴

明治43年生れ。長年国立林業試験場にて雪崩の研究に従事し、昭和46年退職。以後文筆に親しみ現在に至る。

この間、日本エッセイストクラブ賞（第8回）、日本雪氷学会賞（第1回）、吉川英治文化賞（第11回）、アマチュア写真大賞（第1回）等受賞。

著書に、『雪国動物記』（日本出版センター）、『ツキノワグマ物語』（筑摩書房）、『日本の雪』（読売新聞社）、『愛は限りなく』（創樹社）、『日本の雪崩』（講談社）、『雪と氷』（朝日新聞社）、『雪国博物誌』（クロスロード）その他多数。

現在、日本雪氷学会名誉会員。

現住所、岩手県和賀郡沢内村太田。



東北のロビンソン—山の神奇譚

0039—0300—4249

1990年8月30日 第1刷発行

著 者 高橋喜平

発 行 所 株式会社 創樹社

電話・東京435—7733(代) 振替東京3・138079

東京都港区浜松町1丁目2番5号 浜松町丸進ビル3階 〒105

装 丁 岩瀬聡 [中垣デザイン事務所]

本文印刷 松沢印刷

製 本 越後堂

¥1,500—

1990© Kihei Takahashi 乱丁・落丁はお取り替えます。

東北のロビンソン

高橋喜平

目次

1 逃亡……………7

2 マダギ……………13

3 エビヤロ……………21

4 ヤス穴……………27

5 巨根……………33

6 アオシシ……………38

7 イワナ……………43

8 薪……………49

9 和賀岳……………54

10 カタゴ……………61

11 湯の沢……………66

12 徒渉……………72

13 ヒメギフチヨウ……………77

14 土器……………83

15 シラネアオイ……………88

16 火打石……………93

17 キノコ……………98

18 マムシ……………104

28	秋	161	*	あとがき	218
27	山の神	155	*	本書関連地図	214
26	ハシバミ	149	36	望郷	209
25	蛇	144	35	熊狩	203
24	クマイチゴ	139	34	雪崩	197
23	天スギ	133	33	ワラダ猟	191
22	伝承	128	32	ノウサギ	186
21	山刀	122	31	ハチミツ	180
20	熊	116	30	根雪	173
19	ヤマユリ	110	29	ワナ	167

本文写真

著者

本文イラスト

平山英三

東北のロビンソン

——〈山の神〉奇譚

高橋喜平

1 逃亡

「いまだ」

と、熊造は思った。全身の血が逆流するほどの緊張した一瞬がすぎた。彼は銃を川に向って放り投げると、一目散に闇の中を反対方向に走りに走った。明るいうちに、あらかじめ見当をつけておいたが、思いのほか手間どつて、気があせり通しだった。それでも、小路に出たときはいくらかほつとした。彼は星明りをたよりに、遠くへ遠くへと走りつづけた。

実は、熊造が逃亡のことを考えたのは入隊前からで、それとなく準備を進めていた。しかし、なかなか決心がつかず、幾度もチャンス逃がしてきた。いまこのチャンスを逃しては、今度こそすべては終りであるように思われた。近いうちに、某本面に出発するという噂があり、今夜は最後の仕上げの敵前渡河の演習であつた。

ごく僅かな星明りの闇の中で、指揮官が火縄をこちらに向けてぐるぐる回した。その合図は、各自が隠密のうちに前進渡河せよとの命令であつた。熊造はこの合図を見た瞬間決心がつき、銃を捨て、反対方向に走つたのである。

それから約三十分後に渡河が完了し、人員点呼をしたところ、第三小隊第一分隊で人員が一人不足ということになり、調べたところ谷上熊造二等兵が居ないということが分った。そこで、騒ぎが大きくなり、河中で何か事故があつたに違いないと、全員で河を搜索そうさくすることになった。

しかし、なにぶん夜中のことなので思うにまかせず、いったん搜索を打ち切つて、明日の早朝、改めて搜索することになった。その時点では誰も彼が逃亡したなどとは考えず、河の深みにはまつて、事故をおこしたに違いないと判断していた。そのため、彼が所属している第一分隊を監視のために河岸に残して、全員が引き揚げたのであつた。

一方、熊造は背中に追手を感じながら、西に向つてどんどん歩きつづけているうちに、やつと見覚えのある農場の道路に出た。それから、県道を一路山伏峠に向つて急ぎに急いだ。この分なら、夜明けまでには沢内村の貝沢に着けるはずであつた。

幸いなことに、途中誰にも会わなかつた。山伏峠に着いた時には、もう夜が明けて、明るくなつていた。見渡すとまだ、周りには残雪があり、明け方の冷気が身に滲みだ。彼は改めて逃亡してきたことの重大さに身震いしながら、

「俺は、たとえどんな汚名を着せられても、わが道を行く」

と、自分自身に云い聞かせていた。熊造は軍隊の逃亡の罪がいかに重罪かをくどいほど聞かされてよく知つていた。つかまれば終身刑か銃殺刑は必至で、終身刑の場合でも大抵の者は拷問の果てに悶死するのが普通であるという噂であつた。それ故、どんなことがあつても、つかまらな

いようにしなければと心に誓っていた。

山伏峠を下つてくると間もなく貝沢の集落で、そのはずれに熊造の生家があった。彼は胸をどきどきさせながら家に近づいて行つたが、その時、玄関のくぐり戸が開いて、誰か人が出てくる気配がした。彼は咄嗟に、道の横の茂みに隠れて様子を窺つていたところ、祖父の熊吉がこちらを向いて、小便をし始めた。

彼は小声で、

「爺さま、俺だ」

と呼んだ。その声が聞こえたらしく、熊吉は、怪訝な顔をしながら、

「誰か、俺を呼んだが」

と云つて、あたりを見回していた。

「爺さま、俺だ」

熊造は同じことを小声で云つて、体を浮かせるようにして、手まねきをした。爺さまは、

「なんだ、熊造か、どうした」

と云いながら、近づいて来ると、熊造は体を隠すようにしながら、手でおいでおいでをした。その様子に只事ではないとさとした熊吉は、

「どうした、熊造」

と小声で呼びかけて、近づいて行つた。

「人に見られるとまずい、爺さま、こつちさ来てけろ」

と熊造が小声で云つて、爺さまを茂みの中に招じ入れた。

「一体、どうした、熊造」

「あのなあ、爺さま、驚ろくなよ、俺、逃げて来たんだ」

「なに、逃げて来た、それ本当か」

「うん、本当だ、軍隊のことだから見つかったら殺されるにきまつてるから、俺、これから和賀岳さ逃げて行く。詳しいことはあとで話すから、このことは誰にも云わねでけろ。決して誰にも云わねでけろ。」

「分った。んだども、なあ」

「万一、ばれたら大変だ。絶対に親父にもおつ母あにもだまつていてけれ、な、爺さま、分ったべ」

「うん、分った、口が裂けてもこの秘密は守つてやるから安心しろ。ところで、何か爺さまに出来ることがあったら、出来るだけの手助けをするがら、な」

「ありがとう、爺さま、さつそくだが、俺の部屋にリュックサックがあるがら、それを持って山の神のところまで来てけろ。俺がいなくとも、リュックサックを山の神の後のブナの木の間においておいでけろ。人目につかないようにたのむ。早い方がいい」

熊造はそう云うと、尾根伝いに山の神の祠ほくらの方向に急いだ。

じつは、そのリュックサックの中にはまえもつて山中で暮す場合の七ツ道具が入れてあつた。入営する直前に、万一逃亡するようなことがあつた場合を考えて用意しておいたものである。その中味は山刀、釣針、テグス、ハンゴウ、シート、マツチ、塩、衣類等であつた。マダギたちが熊狩の時寝泊りする和賀岳のヤス穴を根拠にすれば、塩さえあれば生きて行けると熊造は考えていた。そのため塩の分量をうんと多くして、二キロにした。一日平均五グラムずつで消費しても、優に一年分はまかなえる計算であつた。

彼の逃亡は異常な体のことで、がまん出来ない屈辱を受けたのが直接の原因であつた。それは、彼の持物が人並はずれた尤物であつて、中隊の評判になり、

「お前、そんなに大きなものをぶらさげて、どうするつもりだ」

とか、あるいは、

「馬に較べたつて見劣りがしないなあ、うらやましいよ」

とか云われて、毎日その屈辱にじいっと耐えていたのである。しかし、それに耐えることにも限界があつて、遂に、死を賭しての逃亡になつたのである。

しかし、逃亡の理由は他にもう一つあつた。敗戦を間近にひかえて、このまま戦地に行つて犬死に同様の死に方をしたくなかつた。お国のためという大義名分は表向きのこと、誰だつてむだ死に行きたくないはずである。それぐらいなら、死を賭してもわが道を行きたいというのが熊造の決心だったのである。そのわが道というのは、縄文人のような生きかたをしたいとい

う強いあこがれであつた。

2 マダギ

山の神の祠ほくらは小高い森の山頂にあった。後ろに一本の大きなブナの木があつて、それが御神体であつた。したがつて、祠の中は空のままで、ただ供物があげられ、燃えさしのローソクがそのままになつていた。熊造は立つたままで、その祠に向つて、柏手を拍つて、礼拝しながら、

「山の神様、わたくしを助けて下さい」

と、心から祈つた。そして、芽ぶき始めたブナの大木を見あげているうちに、それまでもちつづけてきた不安がすうと消えていくように感じた。

彼は万一のことを考え、人から見られないような茂みを選んで、そこにうづくまると、急に疲労を感じ、たまらなく睡くなつてしまつて、つい、深い眠りにおちいつてしまつた。

それから、どれだけの時間がたったのか分らないが、彼は、

「熊造、どこにいる」

という、押し殺したような爺さまの声で眼をさました。

「ここだ」

と、熊造はそばのジサノキをゆすつた。小枝が動いて、その場所はすぐ分つた。ジサノキというのはこの地方の方言で、アブラチヤンという灌木のことである。

爺さまの熊吉はリュックサックを背負い、両手に包みものをぶらさげて、汗だくになっていた。もう七〇才の老いの身には、リュックサックは重かつた。その上、さらに両手に二個の包みを持つたのであるから、汗だくになるのも無理はなかつた。しかし、爺さまは長年の間マダギを渡世にしていって、つい三年前にマダギを止めるまでは、スカリでもあつた。マダギというのは山の神を信仰し、マダギの掟をかたく守つて、熊やカモシカの狩りに従事する狩人のことであつて、十人前後の集団であつた。その統率者をスカリと呼び、絶対の権限をもつていた。それだけに、狩人としての腕が良いばかりでなく、人望があり、統率力に優れた人がスカリになつていた。

彼等の狩場は和賀岳を中心にその周辺の山々一帯であつて、その根拠地はヤス穴であつた。ヤス穴というのは和賀川源流の二俣のつけ根にある洞窟のことであつて、昔からマダギたちの寝泊りに利用されていた。しかも、それは四月の中旬から五月の下旬までの熊狩の時期に限られていた。その理由は、融雪期になるまでは、表層雪崩の危険があつて近づくことが困難で、また、熊狩が終る五月半ばすぎになると、谷を埋めた残雪がなくなり、V字谷の渡渉が不可能になるからであつた。

ところが、戦争が始まつて以来、マダギ達の多くは出征し、そのため、マダギの熊狩は中止さ